

称号及び氏名	博士(看護学)	赤崎 芙美
学位授与の日付	令和5年9月23日	
論文名	看護師のナレッジブローカリング自己評価尺度の開発と関連要因の検討 Development of a Self-Assessment Scale on Knowledge Brokering for Nurses and Examination of the Associated Factors	
論文審査委員	主査	細田 泰子
	副査	北村 愛子
	副査	中山 美由紀

### 論文内容の要旨

**【目的】** 看護師のナレッジブローカリング自己評価尺度を開発し、仮説に基づきナレッジブローカリングに影響する要因を検討することを目的とする。

**【概念枠組み】** 文献的考察に基づき、ヒューマンスキルと根拠に基づく実践（Evidence-Based Practice、以下 EBP）への態度が看護師のナレッジブローカリングに影響を及ぼすという概念枠組みを構築した。

#### **【予備研究1】 看護師のナレッジブローカリングに関する質的研究**

**方法:** 臨床経験5年以上、研究を行った経験を持ち、スタッフの研究や教育に携わった経験がある看護師12名を対象に、協力者が行ったナレッジブローカリングについて、半構成的面接により聴取し、質的記述的に分析を行った。

**結果:** ナレッジブローカリングの構成要素として、1,727のコードから、122のサブカテゴリー、30のカテゴリー、10の大カテゴリー《スタッフと信頼関係を築く》《スタッフ同士や多職種をつなぐ》《質の高い看護実践を目指す》《患者やスタッフのニーズを把握する》《スタッフを取り巻く状況を把握する》《共有するエビデンスを見極める》《エビデンスを導入する》《スタッフや患者の反応から評価する》《エビデンスの定着を促す》《スタッフの能力に磨きをかける》が抽出された。122のサブカテゴリー及び先行研究から尺度項目を作成した。

## **【予備研究 2】看護師のナレッジブローカリング自己評価尺度（案）の表面妥当性および内容妥当性の検討**

方法：臨床経験 5 年以上、修士以上の学位を持ち、修士課程を修了後に医療施設での勤務を行った経験があり、研究や教育に携わった経験がある看護師 5 名を便宜的に抽出し、インターネットを使用したグループインタビューにて、専門家会議を実施した。

結果：予備研究 1 から抽出された 10 の下位概念と 122 の尺度項目について検討し、下位概念および定義、各尺度項目の表現や順序の修正および尺度項目の統合や削除を行った。結果、7 つの下位概念と 80 の尺度項目となった。

## **【本研究 1】看護師のナレッジブローカリング自己評価尺度（案）の内容妥当性指数（Item-level Content Validity Index : I-CVI）を用いた検討**

方法：5 年以上の臨床経験を持ち、修士課程もしくは博士課程を修了している研究者 5 名と、専門資格（認定看護師、専門看護師等）を有している臨床看護師 5 名を便宜的に抽出し、対象者に尺度案 80 項目について無記名自記式質問紙を用いて内容妥当性指数を測定した。

結果：I-CVI 得点が 0.78 以上の 70 項目を採用したところ、Scale Content Validity Index が 0.93 であったため、尺度全体の内容妥当性が確保できた。

## **【本研究 2】看護師のナレッジブローカリング自己評価尺度の信頼性と妥当性の検討**

方法：全国の一般病床数 300 床以上の医療施設から無作為に協力施設を選出し、5 年以上の臨床経験があり、修士課程または博士課程を修了している、もしくは専門資格（認定看護師、専門看護師等）を有している看護師 1,174 名を対象に、看護師のナレッジブローカリング自己評価尺度原案、日本語版 BARRIERS Scale、Evidence-Based Practice Questionnaire（以下、EBPQ）日本語版、個人背景からなる質問紙調査を実施した。信頼性は、内的一貫性（Cronbach's  $\alpha$  係数）、安定性（再テスト法）、妥当性は構成概念妥当性（探索的因子分析、確認的因子分析）、基準関連妥当性（外的基準との相関）を確認した。

結果：494 名（回収率 42.1%）から回答が得られ、473 名（有効回答率 40.3%）を分析対象とした。項目分析、探索的因子分析により【エビデンスの普及】【必要とされるエビデンスの明確化】【スタッフとの信頼関係の構築】【スタッフの能力向上への寄与】【エビデンス

の質の吟味】の 5 因子 32 項目が抽出された。Cronbach's  $\alpha$  係数は 0.776~0.891 であった。確認的因子分析の結果、適合度指標は基準を満たしていた。日本語版 BARRIERS Scale との相関は  $\rho = 0.17$ 、EBPQ 日本語版との相関は  $r = 0.54$  であった。再テスト法による本調査と再調査の Pearson の積率相関係数は  $r = 0.58 \sim 0.75$  であった。

### 【本研究 3】看護師のナレッジブローカリングの関連要因の検討

方法：本研究 2 と同じ条件で、かつ重複しない看護師 1,074 名を対象に、看護師のナレッジブローカリング自己評価尺度、看護師ヒューマンスキル尺度、科学的根拠に基づく実践を適用することへの態度尺度、個人背景からなる質問紙調査を実施した。ヒューマンスキルと EBP への態度が看護師のナレッジブローカリングに影響を及ぼすという概念枠組みに基づき、共分散構造分析を行った。

結果：359 名（回収率：33.4%）から回答が得られ、351 名（有効回答率 32.7%）を分析対象とした。分析の結果、[ヒューマンスキル] から [ナレッジブローカリング] のパス係数は 0.70、[EBP への態度] から [ナレッジブローカリング] のパス係数は 0.15、決定係数は 0.52 であり、正の影響を及ぼすことが明らかになった。モデルの適合度指標は、GFI = 0.959、AGFI = 0.920、CFI = 0.960、RMSEA = 0.074 であった。

【倫理的配慮】すべての研究は、大阪府立大学大学院看護学研究科研究倫理審査委員会の承認を受けて行った。

【考察】開発した看護師のナレッジブローカリング自己評価尺度は、信頼性と妥当性を有していると考えられる。本尺度は、用いる状況やエビデンスの内容にかかわらず使用でき、実際に対象者が活用しやすい尺度となった。ナレッジブローカーの EBP への態度とヒューマンスキルは、ナレッジブローカリングに影響を及ぼす。ナレッジブローカーがスタッフの情報源やロールモデルとして、一つの起点となり、個人や組織にエビデンスを適用し、普及する可能性が示唆された。EBP を促進するために、ナレッジブローカーは EBP に魅力を感じ、スタッフと協働する姿勢を持つことが重要である。

**キーワード**：看護師、ナレッジブローカリング、尺度開発、Evidence-Based Practice

**Key words**: nurse, knowledge brokering, scale development, Evidence-Based Practice

## 学位論文審査結果の要旨

本研究は、看護師のナレッジブローカリング自己評価尺度を開発し、仮説に基づきナレッジブローカリングに影響する要因を検討することを目的としている。これまでに歯科衛生士のナレッジブローカリングを評価する尺度はあるが、看護師のナレッジブローカリングを評価する尺度は見当たらなかった。ナレッジブローカーは変化をもたらすチェンジエージェントとされているものの、看護師のナレッジブローカリングに影響を与える能力や態度は解明されていないことから、独創性・新規性を有する研究である。本研究の成果は、看護師のナレッジブローカリング自己評価尺度を用いて対象者の内省を促進することで、さらなる能力向上に寄与できる。ナレッジブローカーに、能力や態度についての視座を提供することは、ナレッジブローカリングの質の維持・向上やEvidence-Based Practice (以下、EBP) の促進に資することが期待され、学術的重要性・妥当性が認められる。

看護師のナレッジブローカリング自己評価尺度の開発では、半構成的面接法による質的分析をもとに尺度項目を作成し、COSMINの方法論に基づき、尺度の信頼性・妥当性を検討する適切な方法を用いていた。【エビデンスの普及】【必要とされるエビデンスの明確化】【スタッフとの信頼関係の構築】【スタッフの能力向上への寄与】【エビデンスの質の吟味】の5因子32項目から構成され、内的一貫性と安定性による信頼性、構成概念妥当性、基準関連妥当性を有する尺度であることが確認された。さらに、文献的考察に基づき構築した仮説の検証では、共分散構造分析を行い、ナレッジブローカーのEBPへの態度とヒューマンスキルは、ナレッジブローカリングに影響を及ぼすことが示され、適合度は基準を満たしていた。これらのことから、科学的根拠に基づく妥当な研究方法が用いられていることが確認された。本研究の遂行において、「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針」に則り、研究対象者への十分な説明を行い、自由な意思に基づく同意を得る等の倫理的配慮を十分に行ったことが確認された。本研究は、組織にエビデンスを普及するナレッジブローカリング研究に新たな知見を提供し、看護学の発展に寄与するものであると考える。

以上のことから、本研究は博士論文としての学術的価値を有しており、博士（看護学）の学位の授与に値するものと判断した。